辞世にみる滑稽（後編）

高橋真紀子

滑稽な辞世句を調べていて気付いたことがあります。それは、説明的で、観念を詠んだ句が多いということ。これは写生を旨とする俳句の詠み方としてはよろしくありません。かといって、死を前にした覚悟や、人生の意味を込めようとすれば、どうしても説明や観念になってしまう。作品の面白さに関わるところでもあるので難しいところです。

そんな中で注目すべきは、近代俳句の父、正岡子規の辞世「糸瓜三句」でしょう。「糸瓜咲て痰のつまりし佛かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」「をととひのへちまの水も取らざりき」。

結核に脊椎カリエスを併発した子規は、激痛の中、今際の際にある自分を「佛」と描写します。糸瓜をモチーフに、自らの最期を生活の一場面のように切り取る。ブラックユーモア的、滑稽な辞世句に仕上がっています。

ところで、子規に「滑稽なら漱石」といわしめた夏目漱石については、辞世と呼べる句が見当たりませんでした。人生最期の句は、胃潰瘍がもとで亡くなる三週間余り前のもの。交友のあった禅僧宛ての手紙に書いた五句の最後「瓢箪は鳴るか鳴らぬか秋の風」なのだそうです。

死の床で、漱石が最期に口にした言葉は「死ぬと困るから」だそうですから、辞世を作ることなく亡くなったのかもしれません。ちなみに、死の三カ月ほど前、門下生の芥川龍之介への手紙に添えた「秋立つや一巻の書の読み残し」を辞世とすれば、文豪らしいと思うのですが。（個人的な願望です）

一方、俳号「餓鬼」こと芥川龍之介の辞世句は「水洟や鼻の先だけ暮れ残る」であるとよく紹介されています。「鼻」は漱石が絶賛した芥川の代表作。彼の自殺の理由が遺書にあったとされる「ぼんやりした不安」ならば、この句は、死を前にした芥川の心象風景を表した、見事な滑稽と言えましょう。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ただ、「芥川竜之介俳句集」（岩波文庫）の解説では「絶筆ではあっても辞世の吟ではない」「（芥川には）最後の最後まで辞世を準備するような人騒がせの晩年意識はなかったと見做してよかろう」とあるので、ちょっと保留したいと思います。

こんな風に滑稽な辞世を文人の作品に探すのは興味深い作業です。でも、自分で作るとなると、やはり難しい。納得のいく句が詠めないなら、これまで詠みためた作品が後世で評価されることに期待する手もあるかもしれません。そのような思いを残した文人もいます。

江戸時代の川柳の創始者、柄井川柳の句は「木枯らしや跡で芽をふけ川柳」。

浄瑠璃作家の近松門左衛門の辞世歌は「それぞ辞世去るほどにさてもそののちにのこる桜が花しにほはば」。

参考文献　魂をゆさぶる辞世の名句（成美文庫）▽最後の一句（本阿弥書店）▽漱石俳句集（岩波文庫）▽漱石の思い出（文春文庫）など

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。